

卒業後の障害者のことを

知ってくださいます



領家グリーンゲイブルズ 施設長
かとうぎ こうじ
加藤木 貢児さん

プロフィール 横浜国大卒業後、自閉症者の単独型短期入所施設の立ち上げに関わる。その後宅配事業やまぐろ漁船に乗るなどの民間企業で働く。2011年の東日本大震災後ボランティアをしながら県内の特別支援学校で働く。2014年より県立盲学校勤務。働きながら設立準備委員会に参加。2020年4月、上尾市で視覚障害や重複障害のある人たちのための「領家グリーンゲイブルズ」を開設し施設長となる。

学校で臨時任用として働く機会を得ました。2014年からは川越にある県立盲学校（県立特別支援学校瑞保己一学園）で働きました。

特別支援学校の保護者の方と話すとき「学校に通っているときはいいけど、卒業後の生活が心配だ」と多くの方が話します。盲学校でも同じで、子どもたちが小学校高学年から中学部の頃より高等部卒業後の進路が心配で悩む保護者が多いのです。人間にとって「働く」ということはと

今日までできています。

なぜ作業所をつくりたいと思ったのですか
ようか

私は民間企業で働いていましたが、大学では特別支援教育を学び関心をもっていました。その後、埼玉県内の特別支援

「この作業所を開設したのはいつですか
領家グリーンゲイブルズは視覚障害者のための支援施設で、NPO法人「みどり」が経営しています。この施設が開設されたのは、2020年4月なので、2年2か月ほどたちます。この間多くの人の支援を得てなんとか経営が軌道にのり、

でも大切なことだと思います。単に賃金を得るといふことだけでなく、働くことよって人の役に立ち、社会とのつながりができ、それが生きがいとなります。障害の有無にかかわらず、多様な労働の機会が保障される社会が理想です。しかし障害者が働く場所は限られており、就労の機会が十分に整備されていない現状があります。

―開設に至るまで苦労したことはなん

すか

盲学校には視覚障害の子と、重複障害の子のクラスがありますが、とりわけ視覚障害と知的障害の重複する子どもたちは、卒業後もほとんど地域の施設に受け入れてもらえません。盲重複の人は、ある程度の動線が確保できれば自由に動きまわれますが、危険を感じるためか、支援員の指示で施設内でさえ自由に動けなかつたりしていました。それでも川越市や日高市には視覚障害の重複の人を受け

入れる施設がありますが、生徒数の多いさいたま市や上尾市にはありませんでした。このようななかで、上尾市周辺の保護者や関係者が集まって生徒たちの卒業後の進路、生活の場をどうするのかという相談がもたれました。私もそこに加わるようになりました。

話し合いのなかで施設を建設するためにはNPO法人を設立することがよいということになり、2015年6月に設立準備委員会を立ち上げました。そして翌16年7月にNPO法人「みのり」を設立しました。盲学校卒業後の生徒たちの生活が「みのり」あるものになることを願って名付けました。その後、さいわいなことに盲学校在校生保護者の関係者が土地を寄付してくださいました。その土地に施設を建設するために国に補助金の申請をしました。私はこの間、盲学校で病休代替や初任研代替などで働きながら建設の準備をすすめてきました。こうして2020年4月に領家グリーンゲイブルズをオープンさせることができました。ここまで来るのは大変でしたが、多くの人の協力があったることなので感謝しています。

盲重複障害の人の作業所は、調べたと



ころ全国で23カ所ぐらいありますが、ほとんどは入所施設です。でも保護者からはなるべく居住地の近くの作業所に通ってほしいとの要望が多いのです。ですから人口が多く、一定の利用者が見込めるさいたま市や上尾市周辺での開所を目指しました。おそらく埼玉県でなければこのような通所の作業所はつくれなかったと思います。



—ここで働いている人はどのような人ですか

オープンにあたっては、支援員として元盲学校の職員の方にも加わっていただきました。また保護者の方たちにも給食や事務などバックヤードで協力をいただいています。

現在の施設では、生活介護の利用者が8人、就労継続支援B型に1日10人（登録者数は18人）くらいの方が通っています。就労継続支援B型の人は発達障害であったり、生きづらさを抱えている人たちを対象にしています。生活介護は、盲重複の人がほとんどで、午前中に作業をしたら、午後は音楽活動や創作活動をしています。

—どのような作業がおこなわれていますか

利用者はここでどんな仕事や作業をしているのかというと、今はコーヒー焙煎がとても好評で、この施設の活動の中心になっています。しかしこれだけではありません。「やれること、やりたいこと」を仲間（利用者）と話し合って、作業、活動内容を決めていきます。具体的には点字名刺づくりや隣接する畑で野菜を育

て販売もしています。さらに資格をもっている利用者もいますので、マッサージ業もやっています。この施設内でもできますが、希望する人には出張しての施術もしています。それから在宅ワークをしている人もいます。盲学校で使わなくなった点字の教科書を再利用してポチ袋をつくるなどの自主製品づくりもしています。在宅ワークに対する要望はけっこうあるので、もっと伸ばしていきたいと思っています。今は在宅の中で手仕事でできる作業はないかという考えです。

コーヒーが有名になっていますが、最初からはじめたのではなく、市内の喫茶店の関係者などから焙煎した豆をおいしく提供するための研修を受けました。どう淹れたらおいしくなるか、味の濃さの調整、ラテについてなどさまざまなことを学ばせていただきました。その後、多くの方にご寄付をいただき大型焙煎機を導入することができました。おかげ様で大量のコーヒー注文にも対応できるようになりました。

コーヒーをはじめ、ここでつくられたものは施設内で販売している他、ネット通販での販売もしています。また出張販

売として、あげおお土産観光センター（上尾駅東口エージオタウン2階）や上尾市役所内でおこなわれている「水曜手作り市」にも出品しています。また丸山公園で毎年おこなわれている「上尾さくらまつり」をはじめ、市のさまざまなイベントにも参加させていただいています。

ここまでできたのも、地域の方々をはじめ、多くの人の協力があつたからです。これからも地域と連携をとって活動していけるような事業所でありたいと思っています。

—運営するうえで課題はどんなことでしょうか

コーヒー販売が好評で忙しくなってきましたが、単に売ればよいとは思っていません。いかに彼らの仕事のやりがい結びついているかが大切です。機械をオートメーション化すれば大量生産できるようになりますが、彼らの作業がボタン一つ押すだけになってしまったとしたら本末転倒です。ここでは視覚障害者の人たちが中心ですが、彼らがどうしても力を発揮できるのかを考え、作業をつくっていくことが大切だと思っています。

—今後どのように発展させていこうと考えていますか

私も運営のことはなにもわからずにここまでやってきましたが、今後の課題は運営体制の強化です。利用者にやりがいのある仕事を提供し、そのうえで工賃もしっかり支払えるような事業所にしていきたいと思っています。また認定NPO法人への移行や、別法人での単独型の短期入所の開設などの準備もすすめています。

コーヒー焙煎を見学しました

インタビューの後、コーヒーの焙煎をする部屋に案内していただきました。「僕は耳で焙煎をする」というキャッチコピーは新聞でも紹介されましたが、コーヒー豆を焙煎する時、感覚を研ぎ澄ませると豆がはじける「ハゼ音」が聞こえるそうです。その音を聞き分け、最善のタイミングで加熱するそうです。

この作業は3人でやっており、Aさんはタイマー係、豆の温度に気をつけながら秒読みで計る細やかな仕事で、季節ごとに豆の温度に気をつけながら作業をし

—読者の人たちに訴えたいことはありますか

学校の教職員の人たちはそれぞれの職場でがんばっておられると思いますが、私たちを含め、福祉で働く人たちや利用者の実態をもっと学んでほしいと思います。同じ社会で生きる人間として、決して別世界のことではありません。学ぶことによってお互いに成長していけると思います。

ているそうです。Bさんはコーヒー焙煎の総括の総括担当で、豆を入れたり、機を動かしたりします。彼はこの仕事で初めて自家焙煎に出会い、いろいろな豆に出会えるのが楽しいと語りました。Cさんは焙煎のパチパチという「ハゼ音」の間に無音になる瞬間を聞き分けています。自分の感性を生かした仕事をしていると思いました。

問い合わせ先

領家グリーンゲイブルズ

（NPO法人のみり）

埼玉県上尾市領家401-1

TEL 048(729)8264